

2022 年 1 月

第 31 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 31 回日本医療薬学会年会
年会長 齋藤 秀之
熊本大学病院 教授・薬剤部長

事業名： 第 31 回日本医療薬学会年会
主催者名： 一般社団法人日本医療薬学会年会
年会長： 齋藤秀之（熊本大学病院 教授・薬剤部長）
会 頭： 奥田真弘（大阪大学医学部附属病院 教授・薬剤部長）
後 援： 一般社団法人日本病院薬剤師会、公益社団法人日本薬剤師会
熊本県病院薬剤師会、一般社団法人熊本県薬剤師会
日本薬科機器協会

実施日程： 2021 年 10 月 9 日（土）・10 月 10 日（日）※ライブ配信
2021 年 10 月 15 日（金）～11 月 30 日（火）※オンデマンド配信

年会の趣旨

第 31 回日本医療薬学会年会を 2021 年 10 月 9 日(土)・10 月 10 日（日）（ライブ配信）および 10 月 15 日(金)～11 月 30 日（火）（オンデマンド配信）にわたり、完全 Web 年会として開催した。当初は、熊本城ホール等において現地開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、本学会としては初めてのライブ配信とオンデマンド配信によるオンライン開催を実施した。

高齢化社会が急速に進展するとともに、昨今の医療環境や医療開発を巡る情勢の変化は著しく、社会・国民に対してより安全安心で良質な先端的医療を提供するために、医療、医薬品開発、教育、行政等に従事する関係者が各々の職能と専門性を発揮し、また相互に連携・情報共有し諸課題に対峙することが一層求められる時代へと変遷しつつある。一方、大規模地震、豪雨、新型コロナウイルス感染症等の未曾有の災害が頻発している状況にあり、多様な災害発災時の医療提供体制やそれらを担う医療従事者の教育研修も不可避な現況となっている。本年会では、このような医療情勢の変化を見据え、メインテーマを「伝承と挑戦・進化～未来志向で医療薬学を俯瞰する～」に設定した。これまで、本会事業活動や年会等で醸成された学術的財産・知識を継承し、次世代と未来へ繋ぐためにより進化させる挑戦が求められるとの意図から設定したテーマであり、全国各地からの会員、参加者とともに、伝統ある医療薬学を伝承するとともに俯瞰し、未来に向けてさらに発展・進化させるための基盤づくりを議論し情報共有することを企図した。

このような年会趣旨を踏まえ、特別講演 4 題、教育講演 2 題、招請講演 1 題を企画するとともに、年会企画のシンポジウムを含む合計 70 セッションのシンポジウムを実施した。一般演題として、優秀演題候補 20 演題、Young Investigator Award (YIA)（学生）9 演題、YIA（社会人）17 演題、ポスター 967 件、合計 1,013 演題を採択した。また、International Session として、口頭発表 7 演題およびポスター発表 24 演題を採択した。また、International Symposium（国際シンポジウム）2 セッション並びにワークショップ 1 セッションを開催した。シンポジウムのセッション後に、“Meet The Expert”のセッションを設け、オーガナイザー、座長およびシンポジストと参加者が双方向に意見交換と情報共有ができる場を提供した。事前参加登録並びに直前・当日・会期後登録を含め、最終的に参加登録者数は 10,835 名となった。2 日間にわたるライブ配信の総視聴者数は合計 31,817 名、会期後オンデマンド配信の総視聴者数（総再生回数）は合計 503,643 件となった。

会費等の設定

参加費	会員	非会員	学生（会員）	学生（非会員）
事前参加登録	9,000 円	13,000 円	0 円	0 円
直前・会期・会期後登録	13,000 円	16,000 円	3,000 円	4,000 円

事業内容

1. メインテーマ 『伝承と挑戦・進化～未来志向で医療薬学を俯瞰する～』
2. 年会長講演 1 題
3. 会頭講演 1 題
4. 特別講演 4 題
5. 教育講演 2 題
6. 招請講演 1 題（小林がん学術振興会助成）
7. International Symposium（国際シンポジウム） 2 セッション
8. 年会企画シンポジウム 3 セッション
9. シンポジウム(公募) 67 セッション
10. ワークショップ 1 セッション
11. 一般演題 1,013 題
 - 1) 優秀演題候補 20 題
 - 2) Young Investigator Award (YIA)（学生）9 題、YIA（社会人）17 題
 - 3) ポスター 967 題
12. International Session 31 題
13. メディカルセミナー 30 セッション

運営組織

年会長 齋藤 秀之 熊本大学病院
 事務局長 城野 博史 熊本大学病院

【組織委員】

城野 博史（組織委員長）	熊本大学病院	富永 孝治	熊本県薬剤師会
陣上 祥子	熊本赤十字病院	田上 治美	済生会熊本病院
政 賢悟	熊本大学病院	家入 一郎	九州大学病院
池田 龍二	宮崎大学医学部附属病院	市川 康子	JCHO 熊本総合病院
伊東 弘樹	大分大学医学部附属病院	大久保 達也	荒尾市民病院
甲斐 広文	熊本大学	神村 英利	福岡大学病院
北原 隆志	山口大学医学部附属病院	木村 早希子	佐賀大学医学部附属病院
栗崎 貴啓	熊本セントラル病院	坂梨 淳一	阿蘇やまなみ病院
下堂 権洋	いまきいれ総合病院	末吉 栄志	菊南病院
菅田 哲治	西田病院	杉本 幸彦	熊本大学
瀬尾 量	崇城大学	武田 泰生	鹿児島大学病院
田中 順子	熊本大学病院	谷口 一成	熊本労災病院
谷口 隆幸	にしくまもと病院	辻 敏和	九州大学病院
中嶋 幹郎	長崎大学	中嶋 弥穂子	崇城大学
中村 克徳	琉球大学病院	福島 ゆかり	こがなか調剤薬局
益山 貞隆	水前寺とうや病院	増田 智先	姫路獨協大学
松本 亮二	天草中央総合病院	丸山 徹	熊本大学
宮崎 長一郎	(有) 宮崎薬局	森 伸子	宇城総合病院
和田 匡央	済生会みすみ病院		

（敬称略・五十音順）

【実行委員】

合澤 啓二	熊本赤十字病院	阿部 裕子	明生病院
天方 奉子	薬局セントラルファーマシー	石黒 貴子	崇城大学
石塚 洋一	熊本大学	稲葉 一郎	薬局セントラルファーマシー
牛島 智子	熊本中央病院	尾田 一貴	熊本大学病院
鬼木 健太郎	熊本大学	門脇 大介	崇城大学
喜多岡 洋樹	熊本市民病院	小林 祐司	エーピー薬局
近藤 悠希	熊本大学	猿渡 淳二	熊本大学
柴田 啓智	済生会熊本病院	下石 和樹	熊本赤十字病院
杉山 留美子	熊本機能病院	田中 忠宏	済生会熊本病院
田上 直美	熊本大学病院	遠原 大地	熊本大学病院
中川 義浩	久留米総合病院	中村 和美	熊本大学病院
中村 繁良	花園ファルマシア	成田 さわな	熊本大学病院
成田 勇樹	熊本大学病院	畑本 慶太	武蔵丘病院
星野 輝彦	ハッピー薬局	宮村 重幸	崇城大学
向井 光一郎	玉名中央病院	村田 夕起子	熊本大学病院
村本 慎吾	くまもと県北病院	本山 敬一	熊本大学
森岡 淳子	くまもと森都総合病院	森崎 崇文	熊本機能病院
山崎 啓之	崇城大学	山室 露子	熊本市民病院
渡邊 博志	熊本大学		

(敬称略・五十音順)

事業成果

第31回日本医療薬学会年會を、2021年10月9日(土)・10月10日(日)(ライブ配信)および10月15日(金)～11月30日(火)(オンデマンド配信)の完全Web年會にて開催した。東京オリンピック延期の影響により2日間開催となり、当初は現地開催を前提としたハイブリッド開催(現地開催2日間+会期後オンデマンド配信)を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止および年會参加者の安全を最優先し、完全Web開催への変更となった。第30回年會に引き続きオンライン開催ということで、視聴環境の充実、時間・経費負担軽減、オンデマンド視聴の活用など、参加者のWeb開催への理解が進んだ結果、国内外から最終的に1万人を超える参加登録者数となった。

本年會のテーマは「伝承と挑戦・進化～未来志向で医療薬学を俯瞰する～」とした。日本医療薬学会の事業活動や年會等で醸成された学術的財産・知識を継承し、次世代と未来へ繋ぐためにより進化・挑戦することを企図し、医療薬学を伝承するとともに俯瞰し、未来に向けてさらに発展・進化させるための基盤構築について会員・参加者とともに議論し情報共有することを目的として本テーマを設定した。特別講演1では、熊本大学学長の小川久雄先生が「25年にわたる多施設共同臨床研究からのエビデンス」と題して、これまでに実施した数多くの他施設共同研究のエビデンスに基づく循環器疾患領域における最新の薬物治療についてご講演いただいた。特別講演2では、佐賀大学医学部附属再生医学研究センター所長の中山功一先生が「バイオ3Dプリンタを用いた臓器再生の現状とこれから」と題して、バイオ3Dプリンタを用いた臓器再生の最前線についてご紹介いただき、将来的な臨床応用の展望についてご講演いただいた。特別講演3では、長崎大学名誉教授の佐々木均先生が、「医療薬学を基盤とした薬学的管理と製剤開発」と題して、薬学を臨床現場で活用する機会の重要性、さらに医療現場における薬剤師・薬学研究者の能力向上による医療薬学の発展についてご講演いただいた。特別講演4では、国立国際医療研究センター研究所所長の満屋裕明先生が、「AIDS治療薬開発からB型肝炎とCOVID-19治療薬の開発へ」と題して、長年に渡るHIV-1/AIDS治療薬開発の歴史を振り返り、その創薬アプローチを基盤としたCOVID-19治療薬開発の新展開についてご講演いただいた。教育講演1では、独立行政法人国立病院機構 栃木医療センター内科の駒ヶ嶺順平先生が「これからの薬剤師の役割～薬学部卒の総合内科専門医の立場から～」と題して、薬剤師による介入が患者アウトカムをどのように変えうるかをevidenceを踏まえてご解説いただき、薬学部卒の総合内科専門医の立場から薬剤師の役割についてご講演いただいた。教育講演2では、有限会社アップル薬局・I&H株式会社の山本雄一郎先生が、「POSの実践～継続的な薬学管理のために～」と題して、POSの実践による継続的な薬学管理についての実例を挙げ、「薬剤使用期間中の患者フォローアップ」とPOSの関係についてご講演いただいた。招請講演ではUniversity of Michigan College of PharmacyのJames G. Stevenson先生が「Current Issues in Oncology Pharmacy Practice Management」と題して、米国のがん薬物療法における薬剤師の取り組みについて、医療費の管理、「Oncology Stewardship」の概念、抗がん剤暴露対策などの事例を通して、本邦のがん薬物療法における今後の薬剤師の役割について示唆に富むご提言をいただいた。

公募シンポジウムには92枠の応募があり、年會企画シンポジウムと合わせて最終的に70枠のシンポジウムを採択した。病院薬剤師をはじめ、薬局薬剤師、医師・看護師等の医療従事者、大学、企業、行政関係者など幅広い参加者が聴講できるよう、「診療」「教育」「研究」「社会貢献」の領域のセッションをバランスよく構成した。年會企画シンポジウムとして、熊本地震からの復旧・復興における薬剤師の役割をテーマとした「災害時における薬剤師の役割～災害サイクル急性期から慢性期までの地域における医薬品供給体制を考える～」、「災害時における情報の収集、共有そして活用-最適な薬物療法を提供するためのストラテジー」の2セッション、若手医療薬学研究者の育成をテーマとした「若手研究者が繋ぐ医療薬学異分野研究～独創的な研究展開を目指して～」を開催した。国際交流としてInternational Symposium「Challenge and Evolution of Pharmaceutical Health Care and Sciences for the Next Decade-1,2」を2枠(9題)開催し、中国、オーストラリア、日本における薬剤師による役割・取り組みについて紹介された。これらのセッションは完全Web開催であったが、現地開催の臨場感を少しでも提供できるようライブ配信とした結果、常時3,000～4,000名程度の参加者が同時視聴していた。本年會ではさらに、オーガナイ

ザー、座長およびシンポジストと参加者が双方向に意見交換と情報共有ができる場として”Meet The Expert”セッションを設け、シンポジウム後の活発な議論の場を提供し、初めての試みではあったが結果として述べ2316名の参加者が”Meet The Expert”に参加し議論を深めていた。一般演題についてもWebシステムを用いたオンライン発表であったが、合計1,013題の演題、海外からの24演題の発表が行われた。例年通り優秀演題の選考をライブ配信にて実施し、口頭発表から4題を選出し、また、年会企画としてYoung Investigator Award (YIA)を設置し、口頭発表から9題を選出し表彰した。ワークショップでは「薬物療法専門薬剤師申請症例書き方」と題して、薬物療法専門薬剤師の申請に必要な症例報告の書き方についての解説が行われた。また、年会企画として、Web開催配信サイト内に特設ページを開設し、熊本大学病院災害医療教育研究センター長の笠岡俊志先生のご協力のもと、多様な災害発災時の医療提供体制やそれらを担う薬剤師をはじめとした医療従事者の教育研修に関する動画配信を行い好評を博した。さらに、メディカルセミナーも30セッション開催され、いずれのセッションも多く参加者が視聴する盛況ぶりであった。

単位認定に関しては、Web開催での研修単位シール交付方法に従い、日本医療薬学会医療薬学専門薬剤師、がん専門薬剤師、薬物療法専門薬剤師、地域薬学ケア専門薬剤師の単位認定を行った。日病薬病院薬学認定薬剤師制度の研修単位シールの発行については10,290名が申請を行うことができた。一方、日本薬剤師研修センターについては録画配信が単位として認められないことから、本年会では受講シールの発行は断念した。

現地開催の要望も多く完全Web開催への変更は苦渋の決断であったが、2日間開催でも例年と同等数の講演・シンポジウム、さらに2020・2021年の各種受賞講演をライブ配信で開催できたこと、約1か月半のオンデマンド配信により非常に多くの参加者にプログラムをご視聴いただいたこと等、オンラインの利点を生かした年会を開催することができた。反省点としては、急速な感染拡大のため完全Web開催への変更の決断・通知が遅れたこと、想像を超えた視聴アクセス数により一部セッションの視聴が困難な状況となったことなどを挙げる。依然として、年会で本来実施すべき懇親会、市民公開講座などの企画を断念せざるを得ない状況ではあったが、年会関係者・学会関係者の熱意、年会発表者・参加者のご理解・ご協力により、コロナ禍での新しい形式での年会を提案・開催することで将来的な医療薬学の発展に貢献することができた。大きな混乱もなく盛会のうちに終えることができたのは、日本医療薬学会理事会・事務局のご支援と、組織委員・実行委員・学会運営事務局など本年会開催に関わった全ての皆様のご尽力の賜物であり感謝申し上げます。

第31回日本医療薬学会年会 優秀演題一覧

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
O01-05	中川 義浩	独立行政法人地域医療機能推進機構 久留米総合病院 統括診療部薬剤科	医薬品副作用被害救済制度の申請支援体制の現状
O02-05	清水 穂香	浜松医科大学医学部附属病院薬剤部	オンライン固相抽出カラムを用いたカラムスイッチング LC-MS/MS 法によるヒト血清中ペムプロリズマブ濃度測定の開発
O03-04	二瓶 哲	岩手医科大学附属病院薬剤部	VEGF 阻害薬投与患者の蛋白尿発症に対する適正な血圧管理の臨床的意義に関する後方視的コホート研究
O04-01	原 伸輔	大阪大学医学部附属病院薬剤部	トリフルリジン/チピラシルの投与スケジュール変更における有効性と安全性の後方視的検討

第31回日本医療薬学会年会 Young Investigator Award (YIA) 受賞演題一覧

YIA (学生)

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
YIA1-01	秋田 彩佑	名古屋市立大学薬学部 医薬品安全性評価学分野	既存の臨床試験データを用いた直接経口抗凝固薬の有効性と安全性に関する民族差の検討
YIA1-06	小玉 千佳	静岡県立大学薬学部 臨床薬効解析学分野	化学療法誘発性悪心・嘔吐の発現に影響する遺伝的因子の統合解析
YIA1-08	長 邑花	慶應義塾大学薬学部薬学研究科	廃用性筋萎縮による敗血症病態増悪における骨格筋由来エクソソームの関与

YIA (社会人)

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
YIA2-01	池谷 怜	国立保健医療科学院保健医療経済評価研究センター	かかりつけ薬剤師制度の有用性およびその修飾要因の解明:レセプトデータを用いた後ろ向きコホート研究
YIA2-04	齊藤 将之	公立陶生病院薬剤部	ワルファリンとトルバプタン併用時における薬物相互作用の発見とそのメカニズムの解明
YIA2-06	磯田 和也	金沢大学附属病院薬剤部	腎機能変化に依存しないバンコマイシン血中濃度上昇予測因子の探索
YIA2-07	片岡 智哉	名古屋市立大学大学院医学研究科 臨床薬剤学	ピンクリスチン投与に伴う男性性機能障害に対する新規治療法の探求 -ラットを用いた DPP-4 阻害薬の効果の薬理学的アプローチ-
YIA2-08	寺田 公介	国立がん研究センター中央病院薬剤部	婦人科がん領域におけるカルボプラチン脱感作療法の実態調査
YIA3-02	富士原 あゆみ	京都桂病院薬剤科	非小細胞肺癌術後補助化学療法の相対用量強度と無再発生存期間の関連性: 単施設後方視的コホート研究

優秀演題・YIA 最終選考委員

合澤 啓二	熊本赤十字病院	石塚 洋一	熊本大学
岩田一史	熊本赤十字病院薬剤部	牛島 智子	熊本中央病院
尾田 一貴	熊本大学病院	鬼木 健太郎	熊本大学
門脇 大介	崇城大学	喜多岡 洋樹	熊本市市民病院
近藤 悠希	熊本大学	猿渡 淳二	熊本大学
杉山 留美子	熊本機能病院	中村 和美	熊本大学病院
成田 勇樹	熊本大学病院	畑本 慶太	武蔵丘病院
宮村 重幸	崇城大学	向井 光一郎	玉名中央病院
本山 敬一	熊本大学	森岡 淳子	くまもと森都総合病院
山崎 啓之	崇城大学	山室 露子	熊本市市民病院
渡邊 博志	熊本大学		

(敬称略・五十音順)